



キャンパス・コラム

時の迷宮？

卒業式のシーズンを迎えると、毎年ちょっとした「時の迷宮」に迷い込んだ気分になるのは私だけだろうか。大学の教師の常として、1年生から教えてきた学生たちが多摩のキャンパスでそれぞれの4年間を過ごし、毎年3月25日に挙行される卒業式を迎えるのは格別に嬉しいことだ。卒業式の壇上から教員として卒業生の晴れの姿を眺め、4年間の思い出にひたる。続いて学位記を授与する会場で、ゼミの学生たちに記念写真を求められ、教授の顔をして気持ちよく撮影に応じたりもする。さらに学部や通信教育部や大学院の祝賀パーティーをハシゴし、様々にかかわった学生たちの晴れの姿に出会える卒業式の一日は、教員にとっても格別に「幸せな一日」となる。ゼミの卒業記念コンパに出席し、体力がつきるまで学生たちと酒をつきあうのもご愛嬌だろう。

ところが、「宴のあと」の気分を味わうまもなく、すぐに新入生を受け入れる準備に気を奪われ、入学式やオリエンテーションが1週間もすればやってくるのだ。入学式の壇上から緊張した新入生の姿を眺めているときには、もうこの新入生たちを教える責任の重さを新たな気持ちでかみしめている。以前、「時の迷宮」にとらえられたために、ある特定の何年間かを何度も何度も繰り返すTVドラマを観たことがあるが、卒業式と入学式の間短い期間は、あたかも時が4年前に戻りもう一度1年生の教育からやり直すような気持ちに襲われる期間でもある。それでも4月から新たな気持ちで取り組めるのは、新年を迎えるときと同様に、何らかの気持ちのリセット作用が働いているからであろう。そして再スタートする時点は、4年前に戻っているようでいて、確実に時のスパイラルは未来に向けて進み、新入生との年齢が一つずつ離れていっていることを痛感するときでもある。

広報委員 川原 彰 (法学部教授)